

我々が未来へ引き継ぐACCUの精神

～ アジア太平洋地域におけるACCUの出版・読書推進活動の功績に感謝 ～

2009年12月8～10日、ACCUは東京において「アジア太平洋における図書開発と読書推進に関する専門家会議」を開催しました。本稿は、アルマリオ氏が30年以上にわたるACCUの図書開発・読書推進活動を振り返った、初日の基調講演の全文です。

ヴィルヒリオ・アルマリオ

詩人。昨年までフィリピン大学文学部長を務める。1979年ACCU出版技術研修コース研修生。以降、ACCUの児童書共同出版事業の推進者として、野間国際絵本原画コンクールの審査員など、多岐に渡りACCUの図書開発・読書推進事業に関わる。2003年にフィリピン政府による文学芸術部門のナショナル・アーティストに認定された。



ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）に戻って来て、友人や同僚たちと再会できたことを非常に嬉しく思う一方で、35年を経た今、ACCUが図書開発活動を廃止する方針であると聞きとても悲しく、残念です。

今日はこれまでのACCUの活動を振り返ってみたいと思います。

ACCUとの出会い

はじめに、教材制作に関するACCUの第12回出版技術研修コースに出席するために、初めて東京を訪れた1979年9月を思い出します。私はほぼ1週間遅れて参加しました。フィリピンを出発する前にやっておくべき仕事が多量に山積みだったため、というのが表向きの理由です。当時、私のアダルナ児童書プロジェクトはやっと3年目を迎えたところでした。しかし、フィリピンを直ぐに出発できなかった本当の理由は、私の名前が戒厳令に反対する活動家リストに載っていたからです。イメルダ・マルコス大統領夫人が私の児童書プロジェクトを支援し、財政的にも援助していた事実にもかかわらず、軍は私に出国許可を与えてくれなかったのです。幸運なことに、たまたまマルコス夫人が当時軍の最高司令官であったファビアン・ヴェール将軍と話しているのを見かけ、この好機をとらえてマルコス夫人に私の窮状を訴えました。夫人は、ヴェール将軍に私を助けるように求め、ヴェール将軍はその場で、私の出国許可とパスポートの発行を求めた将校への手紙に署名してくれました。私は一日でパスポートを手に入れ、フィリピンのユネスコ国内委員会の援助を得て、2日後には日本へのビザも取得しました。

9月の東京は、熱帯地方から来た私のような者には少し肌寒く感じられましたが、非常に現代的だけれども、とても清潔で整然としている印象を受けました。環境汚染が進行し、ゴチャゴチャしてあまり衛生的ではないマニラとは雲泥の差でした。また、成田から東京まで乗ったリムジンバスも清潔で、便利な上に時間通り。そして、東京のターミナルからACCUまで乗ったタクシーは大きく清潔で、

運転手は制服を着用し、東京の混雑した交通の中でも信頼できました。

ACCUのビルを見た時の驚きも覚えています。大きく堂々としていて、フィリピンの出版社の狭苦しく、みすぼらしいオフィスとは比べ物にならないくらい、立派な建物でした。それでも、中に入るとオフィスにはアジア太平洋地域から集められた本や資料が所狭しと置かれ、足の踏み場もありませんでした。ここでは、スタッフが時計仕掛けのように規則正しく仕事をしていて、研修コースの全てのセッションやミーティングも時間通りに始まり、時間通りに終わりました。ここでは朝食時間も指定されていました。なぜなら、毎日参加者を電車で乗せてACCUまで連れて行ってくれるACCUスタッフとホテルのロビーで落ち合う時間が決まっていたからです。

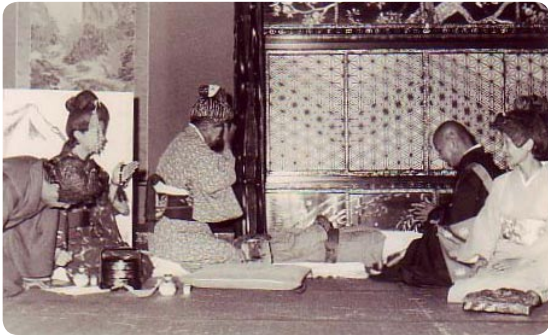
ACCUスタッフは、参加者のどのような要請にもいつも快く応え、愛想が良く、とても親切でした。ホームシックにかかった参加者がコレクトコールをかけるのを手伝い、昼食の間に雨が降り出した時には、傘を用意してくれました。日本の作家やアーティスト、出版社の人たちとのミーティングを設定することはもちろん、銀座見物や秋葉原でのショッピングにまで付き合ってくれました。



図書開発専門家会議で挨拶する故伊藤良二氏（1970年代）

ACCUの初代理事長の故伊藤良二氏は、私にとっては父のような存在でした。彼は、私の児童作家兼本制作者としての新しいキャリアについて、いつも励ましてくださいました。彼は研修コースを通して私を育て、他の出版関係者との間を取り持ち、図書開発について貴重な助言をしてくださいました。また、フィリピン児童書業界の陰

悪な政治的あるいは商業的な思惑に負けないように励まし続けてくださいました。時には、彼が日本での私の活動を後押ししてくれているのではないかと思うほどでした。その後、日本に頻繁に（時には年に2回）訪れるようになり、児童演劇祭やアジアの子供の玩具やゲームに関する1週間のセミナーなど、ACCU以外のワークショップに参加できたのも彼のお陰だったと思います。参加者としてしゃぶしゃぶを食べた時や、ACCUの会議で議長や報告者を務めた後に、記念品としてACCUのボールペンをくださった時に見た彼の大きな笑顔を思い出します。また、毎回陽気で愉快的なプログラムが企画されている箱根での閉会式で、芸者の格好をして踊っていた彼を忘れることができません。



ACCUスタッフによる歌舞伎実演

素晴らしい歌舞伎と、長いけれども奥深い能を初めて見た時のこと、素晴らしいピカソ展、現代日本の特徴である伝統とハイテクの融合など、ACCUへの訪問は、常に日本文化との新しい出会いと素晴らしい魅力に満ちていました。ホテルの浴衣、緑茶、桜の下で飲んだお酒、見えたと思えば消える富士山頂の眺望、京都に向かう新幹線の窓から見た、飛ぶように過ぎ去る人々や村々の様子。これらの全ては報告書には綴られてはいませんが、ACCUが東京で開催した全ての専門家会議や研修コースのとても重要な一部であると思います。

また、今日はACCUのこれまでの貢献を称える時でもあります。

アジア太平洋地域の図書制作の発展と改善、読書と識字の推進を目的としてACCUがこれまで実施してきた様々なプロジェクトや活動を記念し、その功績を称えたいと思います。

出版技術研修コースと著作権事業

まず、最も記念すべきプロジェクトは、1960年代に始まり、1969年から2003年まで主要年間プログラムになった出版技術研修コースです。このコースには、毎年12カ国を代表する少なくとも12名が参加しました。参加者の大半が作家兼編集者、出版関係者、印刷関係者で、彼らはそれぞれの地域における図書制作の発展に貢献してきました。通常1ヶ月続くこの研修コースは、ACCUの事業の中で最も費用がかかりますが、その中核をなす教育活動でした。今日まで、このプログラムはアジア太平洋地域におけるユニークで重要な取り組みであり続けました。参加者からの強い要請に応じて、ACCUは研修を定期刊行物の編集、教育的な児童書の出版、子供向けのイラスト、翻訳などに関する専門的なコースへと質的に充実させていきました。



出版技術研修コースで日本の出版社を訪問（1973年）



出版技術研修コースで日本の出版関係者と議論（1973年）



出版技術研修コース巡回講師団派遣（1977年、マレーシア）

また、この研修コースは東京にとどまらず、高まる要請に応じて、ACCUはアジア太平洋地域の様々な場所で短期ワークショップを提供できるように、1973年に巡回講師団派遣プログラムを始めました。当初、この講師団は日本人の専門家で作られていましたが、その後、ACCUがアジア地域の他の専門家にも参加を呼びかけました。この取り組みは、日本人とその他のアジアの専門家たちの間の対話と交流を促しただけでなく、アジアの専門家たちに彼らの国の外で何が起きているかを知る機会を提供しました。1996年までに、巡回講師団は、ラオス、ベトナム、ミャンマー、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、マレーシア、フィリピン、タイ、パキスタン、インド、インドネシア、パプアニューギニア、モルディブ、韓国、モンゴル、中国を訪問し、学生、教育者、作家、編集者、アーティストを対象として、児童書の執筆とイラスト、編集、その他のトピックに関するワークショップを実施しました。

その数年後、1985年の報告書に次のように述べられています。この研修コースとワークショップが対象地域の出版関係者に大きく貢献していることは意見が一致するところでしょう。

私は、図書制作に関わるスタッフのトレーニングは非常に貴重なアプローチであり、図書制作の各分野に関わる人たちの技術を高めるのに有効な方法であると思います。私の国はこれらのスタッフを訓練するためのリソースを有していませんので、このようなトレーニングプログラムは大歓迎です。

また、アジア太平洋地域で開催する図書制作トレーニングコースのために専門家チームを派遣することは、多くの知識人や専門家と接する機会を提供し、彼らが持つ知識と書籍に対する関心を共有することに繋がり、ひいては、限られた資源の故にこれらの書籍を出版できそうにない国々を援助することに繋がります。

私は1997年にフィリピンで実施されたACCUのイラストレーター育成のための出版研修コースの開催に共催者として関わりました。フィリピン大学で開催したこの研修には、20名以上の若いイラストレーターが参加し、日本の想像力に富んだアーティスト田島征三氏を講師として迎え、彼の下でトレーニングが行われたのです。

2005年、ACCUは知的財産の尊重と促進に関連する問題にも取り組み始め、著作権に関するワークショップを開催しました。この年には、著作権に関するワークショップを2回、ベトナムとミャンマーで開催しました。その後、引き続き、中国、モンゴル、バングラデシュでもワークショップを開催し、2008年には、カンボジアでもセミナーが実施されました。

共同出版事業

もう一つのACCUの主要な活動は、アジア共同出版プログラム(ACP)です。後に、当プログラムは、太平洋地域の島々や新興国を含めるACCUの拡大方針に沿って、アジア太平洋地域共同出版プログラムと改名されました。書籍や他の読み物の出版は、ACCUの研修コースの重要な要素です。ACCU自身も、質の高い図書を制作する方法についてのモデルを提供しなければならない立場にあります。域内での問題や地元の出版社が気付いていない問題に焦点を当てた読み物を出版することによって、アジア地域を感化させる必要があります。

1971年から1972年にかけて、ACPは共通の読み物を計画するために、アジア地域における一連の協議会を数回にわたり開催しました。これらは、ACPの非常に重要な側面を示唆するものとなりました。すなわち、メンバー国の専門家、作家、アーティストを参加させることによって、ACPの計画・制作準備作業を民主的な方法で推進していくことを目指したのです。メンバー国に参加を要請してその貢献を待つ代わりに、トピックの選択、テキストの執筆、本のイラストとデザインという全過程に、各メンバー国が推薦した専門家を参加させたのです。このような方法は時間がかかり、時には職務怠慢な専門家たちをまとめるために、ACCUスタッフに多大な忍耐を要求するものとなりました。しかし、このACPシステムによって生み出された図書リストが、このプロジェクトの素晴らしい成功を証明して



エコロジー・シリーズの中で人気のあった2冊



2000年のACP会議(東京)

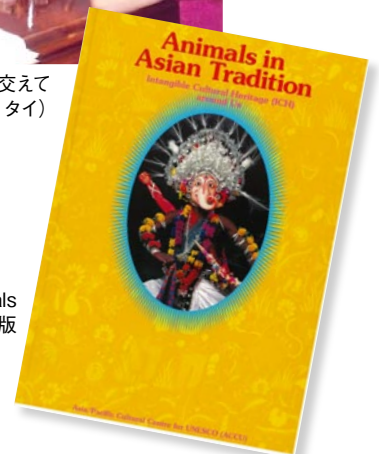


エコロジー・シリーズの本を編集。価値観の違いから何度も議論を重ねた(1996年、東京)



フランス人の編集者・デザイナーを交えて無形遺産の教材を検討(2004年、タイ)

無形遺産の教材“Animals in Asian Tradition”を出版(2007年)



います。ACP本のマスター版は英語ですが、世界中の言語への翻訳・出版を無料で行っています。

アジアの昔話シリーズやエコロジー・シリーズは特に人気の高いシリーズで、これらの2つのシリーズは、アジアの主要言語に翻訳された本の中で最大の出版部数を誇っています。

ACCUの集計によると、最初の昔話集の発行部数は893,000部を超え、アジアにおけるほぼ全ての主要言語に加え、スペイン語版、フランス語版、ポルトガル語版、ハンガリー語版、スウェーデン語版、フィンランド語版、デンマーク語版にも翻訳されました。エコロジー・シリーズでは、"TREES"の発行部数が最高で、237,500部でした。インドでは、"WATER"と"THE SUN"が11の言語に翻訳されています。総計すると、ACPは28の英語のマスター版で、合計4,571,999部発行されたことになります。この活動もまた、ACCUの目的である「図書出版と読書推進に向けて、アジアの人材と資源を活かすこと」に大きく貢献しました。

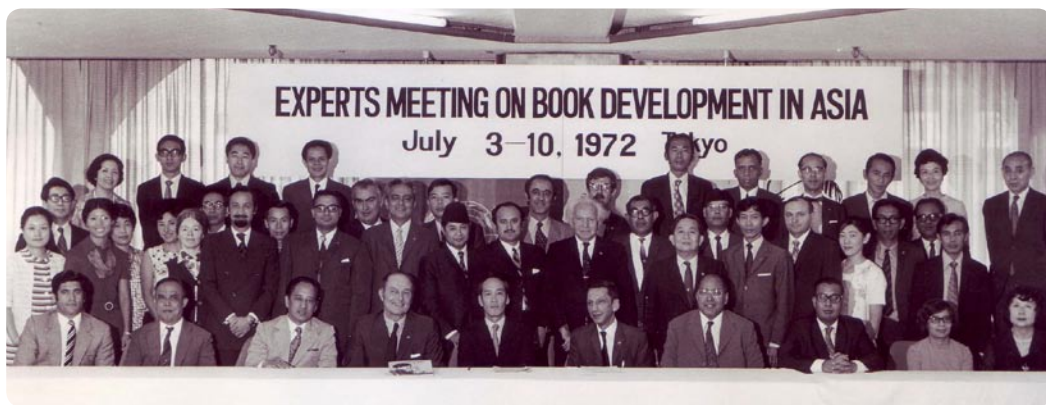
ACPのシステムは図書制作にとどまらず、衛生的な水や人々の暮らしなどに関する識字パンフレットの制作、アニメストーリーの共同制作のようなACCUの特別プロジェクトにも活用されました。もちろん、ACCUは本の推進の取り組みにおいて、その他の創造的なアプローチも採用しています。例えば、文化的なコンテスト、ブックフェア、展覧会などの主催です。中でも最も注目に値するのが、野間国際絵本原画コンクールです。実際、当時ユネスコの担当局長であったミラグロス・デル・コラル女史は、「世界中の図書開発に対する野間の貢献は最も優れた事例の1つです」と述べています。



野間国際絵本原画コンクールを審査する安野光雅氏(左)ら。(1980年代、東京)



野間国際絵本原画コンクール授賞式(1979年、東京)



1972年図書開発専門家会議の参加者たち

次に、地域統合センターとしてのACCUを記念し、その功績を述べたいと思います。

APPREBの事務局として

アジア太平洋地域における文化的結束を強化するACCUの優れた能力は、ユネスコがアジア太平洋地域読書推進・図書開発共同事業 (APPREB) の事務局として、ACCUを選んだ事実が如実に示しています。1991年に始まったAPPREBの計画会議が、ACCUの指揮の下に1993年に東京で開かれました。ミラグロス・デル・コラル女史もこの会議に出席し、地域内のネットワーキング手段としてのAPPREBの重要性を強調しました。しかし、彼女がAPPREBについて述べたことは、ACCUの過去と現在の活動をそのまま述べているように聞こえました。

APPREBは、以下の目標達成を目指しています。すなわち、全ての人が永続的な識字と生涯にわたる読書習慣を身につけられるように援助すること;質の高い児童書、副読本、識字資料を開発すること;地方の読書センターや移動図書館を構築すること;各国の能力、キャパシティ、インフラを強化すること;図書の推進、制作、流通に必要なスキルの向上と書籍業界の指導者のトレーニングのための研修プログラムをサポートすることにより、資源(特に人材)を増やしていくこと。

これらの目標を達成する最良の方法は、プログラムやファンド・レイジングに関する意思決定をネットワークメンバーに分散させ、個人と機関の連携を強化し、研究開発を奨励すること、そしてプログラムの有効性と成果についての継続的且つ批判的な見直しを促進することです。

このように、1993年以降、ACCUの通常の活動は、メンバー国により表明されたニーズに応じて援助するというAPPREB目標の一翼を担うことになりました。これが、研修コースが時として図書マーケティング、コンピュータを活用した出版、APPREBメンバー国の要請によるその他のトピックに重点的に取り組んできた理由です。各国の研修コースやセミナーは、村の図書館用のマニュアル開発、翻訳のためのワークショップ、各国の図書政策の策定などのAPPREBのニーズに関するテーマを含むようになりました。さらに、ACP計画会議において、代表者たちはAPPREBの繋がりを

促進するために、インターネットを利用することを承認しました。この提案されたAPPREBウェブサイトの内容は、メンバー国の図書業界に関する情報を提供し、地域内で出版されている本を購入したいと思っている読者にサービスを提供するというものでした。

ACCUの精神を引き継いで

ACCUはまさに、アジア太平洋地域を結びつけ、その中心となって、図書と読書の推進に向けて、様々なアイデアと活動の情報交換と普及を推進してきました。しかし、その使命はまだ全うされていません。多くのアジア諸国においては、出版産業は持続可能なレベルではありませんし、本も貧しい家庭にはいまだに手が届かない存在です。読み書きができない人も多くの地方で存在しています。要

するに、より識字率の高い、より機能的なアジア人世代の実現に向けてやるべきことがまだ多く残っているのです。

図書開発に関するACCUの活動は終わりを告げようとしていません。私たちにはそれを止めさせることはできませんが、この専門家会議が、ACCUが過去35年間にわたって育ててきた精神の終焉会議となつてはいけません。そうではなく、ACCUが私たちの地域で始めたことを続けていくのだと今度は私たちが固く決意すべき時なのです。私たちはACCU精神を永続させるために私たちの時間を注ぐべきです。私たちは個人としてあるいは団体として、ACCUの例に倣うべきです。第一にアジアの人々の能力に対するACCUの信念と信頼です。第二は、図書を推進し、出版産業を育てるという目標を達成するために、共同作業やネットワーキングの価値に対してACCUが示したリーダーシップです。皆さん、私たちがこれらを引き継いで、この会議から始めていこうではありませんか。

アジア太平洋における

図書開発と読書推進に関する専門家会議 (12月8~10日)

文：土屋恵里（文化協力課）

ACCUが来年度から新しい体制でスタートすることが決まりました。これを機に、ACCUの39年間続いた図書開発事業に終止符を打つことになったため、その成果を評価しACCUの図書開発と読書推進に関する精神や活動方針をアジア太平洋地域の関係機関に引き継ぐために、東京で専門家会議を開催しました。図書開発・読書推進の中心的役割を果たしている関係機関からの代表者とACCUの図書開発事業への協力者を18カ国から20名招へいしました。

12月8日と9日の会議では、2名の方に基調講演をしていただきました。ヴィルヒリオ・アルマリオ氏（詩人・前フィリピン大学文学部長）は過去30年以上に渡るACCUの図書開発事業について振り返り（本誌P.2-6参照）、土門康男氏（講談社エディトリアル代表取締役）は出版産業と読書推進の現状と将来について問題提起されました。それをもとに、各国の図書出版の現状が共有され、ACCUがこれまで行ってきた図書開発と読書推進事業がアジア太平洋地域および各国に与えた影響や成果について発表し合いました。

また、ACCUが図書開発・読書推進プログラムを締めくくることについて各国が確認し、理解を得ることができました。今回の会議の場では、将来的な域内の協力体制についてリーダーシップを取る組織について確認するには至らなかったものの、数カ国の参加者から今後検討して行きたいとの意思表示がありました。

また、3日目のプログラムとして、シンポジウム「アジア太平洋における地域協力の現在-文化と教育の発展のために」を教育協力課と合同で開催しました（本誌P.7-8参照）。

新しい時代の中、過去の事業をそのまま行うのではなく、新し

く、創造的なアプローチで図書開発・読書推進事業に取り組んでいく必要があると思います。中国や韓国の参加がなかったのは大変残念に思われますが、ACCUの図書開発・読書推進事業に貢献して下さったすべての関係者に感謝しつつ、ACCUが図書事業から撤退した後も、図書開発・読書推進プログラムが地域レベルで発展していくことを願っています。



セッションの様子



プレゼンテーション後の活発なディスカッション



基調講演者から多くのインプットがあった